

# 北條家医学・医療関係資料

蒲 原 宏

---

I はじめに .....	(41)	1.医学書
II 医家北條家の成立 .....	(42)	2.古眼鏡
III 北條家と医学の系譜 .....	(43)	3.医療関係用具
1.北條家の人びと		V まとめ .....
2.北條家における医学の系譜		VI 調査資料集 .....
IV 北條家の医学・医療関係資料		
.....	(48)	

---

## I はじめに

佐渡郡金井町大字泉字立野乙33（旧下矢馳村）にある北條家（現戸主北條哲郎氏、管理者北條哲郎）の住宅は、昭和52年1月28日国の重要文化財（建造物）の指定を受けた18世紀後半の民家である。

北條家は代々道益を名乗った漢方医であって、17世紀後半から19世紀半ばにいたるまで佐渡の中央平野部農村地帯の医療を担当していたので、医療関係資料の累代の蓄積が行われていた。

今回の総合調査では、佐渡における一医師の医業形成と医学の修学系統および医療・医事に関する事柄を大よそ組織的に追及することができたので報告する。

## Ⅱ 医家北條家の成立

医家北條家の初代北條道益が医師となったのは佐渡国内でも特異な系列に属する。

初代北條道益は、もとは丹波国氷上郡真言宗岩瀧寺の住職で賢清と言い、寺領問題の紛糾から寛文3年（1663）4月下野国小山での直訴の咎で佐渡へ流罪となり、還俗して相川町弥十郎町に住み、医業と卜筮を営んでいた特異の履歴の人である。

宝永4年（1707）8月四代將軍徳川家綱の側室桂昌院三回忌法要の恩赦で、34年間にわたる流罪が赦免となったのが齢83歳であった。赦免後も、老中から許可されて佐渡に永住することになった。

配流の地、しかも孤島に医師として定住するにはそれなりの理由がなければならない。

第1の理由は、卜筮の術に長じていた真言宗の僧でもあり、すでに延宝7年（1679）には奉行所の命により立春の日を以て国運の吉凶を占うまでに社会的な信用と地位を得るにいたっていたこと。このことはおそらく長い流罪期間に確立していったのであろう。

第2の理由は、天和元年（1681）流罪になった小倉大納言実起とその次子、斎が天和3年（1683）病臥した際に、安田玄意・蜷川長節らの奉行所詰めの官医と対診治療し、一時的ではあったが病苦を除いて医師としての実力が官にも島民にも信頼すべきものとして定着していた。

また地役人本間四郎左衛門や相川町弾誓寺の住僧に行った治療による病状の回復は地元民の上位階層との交流を促し、開業医師としての地位を強固なものとし、もはや島外での生活は考えられなかったのであろう。

初代道益の書き残している患者症例の病状記録は、前記の小倉実起・本間四郎左衛門・弾誓寺の僧万日の3名であるが、実起の次子、斎が死にいたるまで医療を行ったことも、道益の記述及び祐玄からの書状でも明らかである。

道益は開業医として医業収入を蓄積し、元禄7年（1694）すでに相川弥十郎町に28間と7間半、屋敷7畝歩という住居を持つほどの経済的な実力者となっていたのである。

医業で得られた収入が土地資本として転換されてゆく経過については明らかでないが、『金沢村史稿本』に「町内の豪家に伝之亟なる者あり、

田地を和泉、下矢馳村二村に有す、元禄中道益其家を請ひ、移りて下矢馳村立野に住し、専ら医術を拡張す」とあり、道益の流罪赦免の宝永4年（1707）より前に下矢馳村立野に移住したものであろうか。

下矢馳村に移住後も医業収入で得られた資本は累代土地資本として蓄積され、天保8年（1837）の「和泉村立野田畑屋敷小前反別分半帳」によると、北條家分家の北條孝左衛門が年貢高21石1斗9升、北條本家（道益）の年貢高が15石4升5合で合計36石余となり、村の全年貢高の3分の1に相当する。

北條本家は寛保2年（1742）にも北條利右衛門という分家を作り、土地の分割を行っている。以上の2つの分家設立以前には3町歩余の田地を常時所有する経済力が医業収入以外に確保されていたのである。医師でもあった北條本家が累代にわたって寺社に寄進した土地の記録によっても、その経済的な実力の一端を知ることができるのである。

すなわち、近村の社寺に対して寛延2年（1749）2月・宝暦8年（1758）3月に北山神社（中興）に計4反7畝24歩、宝暦8年（1758）2月に天神宮（泉）に1反9畝、同年3月八幡宮（新保）に2反2畝20歩、明和6年（1769）3月には薬師堂（大和田）に2反2畝18歩の土地を寄進しており、その合計は1町1反歩余となっている。

北條本家の土地所有は泉地区のほぼ全域に及んでいたことが知られる。

このように、経済的に強固な基礎があつてはじめて地域に密着した医家の成立が可能となってくる。

### Ⅲ 北條家と医学の系譜

#### 1. 北條家の人びと

北條家の医系は初代北條道益にはじまり2代道倬（医）に受け継がれる。3代利右衛門（道寛）は医を継がず分家するが、4代道益（医）、5代道悦（医）、6代玄通（医）、7代三省（医）と医系が続き、結局6人の医師が輩出し、明治17年3月6日三省の病死により医系は絶える。しかし累代の医家時代の医学文化遺産は8代欽、9代道益、10代哲郎と守られ今日に継承されている。北條家の累代過去帳によってみると次のごとくである。

(1) 初代 北條道益(医)：元流人、岩瀧寺賢清、父は快舜(慶安3年8月3日没)、兄は権大僧都朝慶(貞享元年11月21日没)。還俗して北條時信、通称道益、宝永5年(1708)10月9日没、84歳、密伝院理法快善居士。妻は「観智院円理妙空大姉 元禄13年(1700)5月15日没 相川下戸木屋ヨリ嫁ス」と過去帳にある。

(2) 2代 道倬(医)：通称道益、宝暦7年(1757)12月19日没、教道院雪山高阿居士。

(3) 3代 道寛(利右衛門)：道倬の長男、安永9年(1780)8月5日没、実応院還寂道寛居士。

(4) 4代 道益(医)：道寛の子、天明4年(1784)4月11日没、乗雲院智峯了達居士。

(5) 5代 道悦(医)：梅津村余田佐兵衛家より北條家に入る、通称道益又は道庵、嘉永元年(1848)11月29日没、金昌院南山如洞居士。

(6) 6代 玄通(医)：道悦の子、通称道益、名は時邦、安政3年(1856)9月8日没、42歳、嘗草院玄翁道通居士。

(7) 7代 三省(医)：通称道益、名は守信、明治17年(1884)3月6日没、40歳、滄源院玉水益道居士。

(8) 8代 欽：旧姓本間氏、金沢村村長、昭和20年(1945)7月29日没、79歳、真蓮院清欽道証居士。

(9) 9代 道益：金井町町会議長、昭和45年2月20日没、69歳、真照院法徳道益居士。

## 2. 北條家における医学の系譜

現在北條家に残されている医学および医療関係資料によって北條家における医学の系譜についてながめてみる。

初代北條道益がどのようにして医学を学んだかを立証する直接資料はない。道益生存中(1624~1708)に、蔵書に書き込みを行ったと推定される「新刊名方證類医書大全(医学源流)明：熊宗立、寛永9年(1632)版」の「佐州雑太郡下矢馳邑北條道益蔵主」(図1)の筆跡、「新鐫増補脈論口訣 梅村弥右衛門・同三郎兵衛刊、天和3年(1683)版」の「宝永四年丙亥六月此本二宮村善助貴進、此代五百拾文買求申候」との裏書きから、北條家に現存する医書のほぼ半数は初代道益生存中にその医学研修の目的で蒐集されたものと推定される。

初代道益の手沢本であった医書のうち、日本の医師によるものをあげると次のごとくである。

師語録	曲直瀬道三	寛文10年刊
脈譯簡略	曲直瀬道三	延宝8年刊
増補師語録	曲直瀬道三	貞享元年刊
聖功方(授蒙聖功方)	曲直瀬道三	刊期不明 (図2)
日用功方(増補燈下集)	曲直瀬道三	〃
切紙約言(切紙)	曲直瀬道三	〃
切紙	曲直瀬道三	〃 (図3)
道三秘集	曲直瀬道三	写本
薬性能毒目録	曲直瀬玄朔	刊期不明

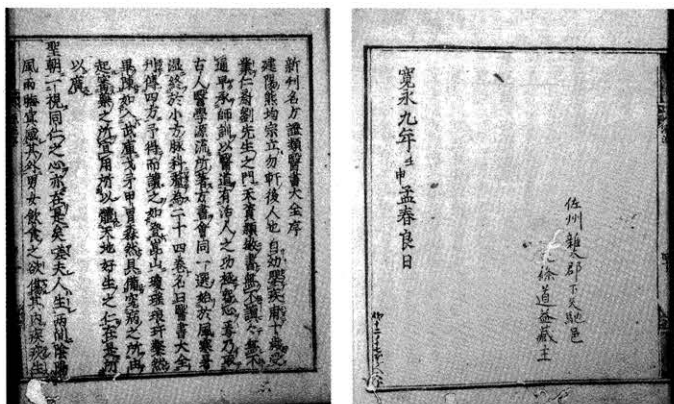


図1 初代北條道益手沢本 「新刊名方證類医書大全」(医学源流)  
寛永9年(1632)刊

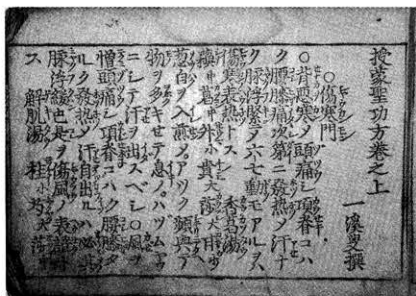


図2 曲直瀬道三著 「授蒙聖功方」  
(刊期不明なるも江戸初期か)



図3 曲直瀬道三著 「切紙」  
(刊期不明なるも江戸初期か)

すなわち、室町末期に関東・川越古河の医僧田代三喜（1465～1537）が明に留学して、我が国に伝えた、金・元、殊に元の李東垣（杲）および朱丹溪（震亨）の医方は、李朱医方派（後世派）とよばれているが、三喜の後継者であった京都の曲直瀬道三（1507～1595）とその子玄朔（1549～1631）の著作に集中している。また、玄朔門下の岡本玄治（1587～1645）の著書「玄治方口解」（寛文4年刊）などもあること、また田代三喜が明から帰国する際に師の僧月湖の著述「全九集」を招来し

たが、その和刻版も北條家の蔵書の中にみられることから、室町時代末期から江戸初期に隆盛した李朱医方派の医学修業を系統的に行った医師であったといえる。

蔵書の中の和刻中国医書も元時代のもの刊本6、明時代のもの刊本7・写本5、金時代のもの刊本1の計19種で、全28種の約68%を占めていることから、中国、明時代に隆盛した李朱医方（後世派）の原典に遡っての医学研修を行ったと考えられる。

その蓄積された医学の実力を発揮し世の注目をあびることとなったのが、初代道益流罪赦免の24年前の天和3年（1683）4月に発病した小倉大納言実起の病氣に対する診断と治療実績であった。

北條家に伝えられている初代道益自筆の「小倉大納言御病證之様体」は、その実情を生々しく今日に伝えている。（図4）

これにも李朱医方派の処方的一端がうかがえるのであるが、この記録は、新潟県内において発見された医師が自ら書いた病曆書の中で最も古いものであり、これと同綴されている地役人本間四郎左衛門の病歴・相川弾誓寺の僧万日の病歴とともに貴重な医学病歴史の資料である。

（図5・図6）

このように初代道益によって系統的に体系づけられた李朱医方派の医学は、すんなりと2代道倬に継承されたようで、道倬生存中（？～1757）

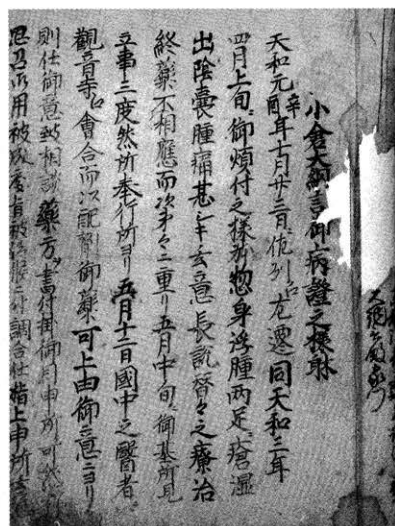


図4 初代北條道益自筆の小倉大納言実起治療の病歴書

に購入されたとみなされる医書は極めて少ない。

4代北條道益の時代となると、内経と傷寒論に拠った名古屋玄医・後藤艮山らの実証主義的な古医方が提唱された医界の風潮を敏感に反映して、吉益流古医方派と賀川流産科という医学の実技修得へと傾斜してゆくのが、その購入蔵書や医学写本からうかがえる。

しかし医学の系統の系譜について証明できる資料は存在しない。

5代道悦（通称道益 ？～1848）

の医学修業についてもその系譜は明らかでないが、通称道益といわれたこの人物か、あるいは6代玄通（通称道益 1815～1856）かが京都の漢蘭折衷派の伊良子家へ医学修業に出国するため、文政12年（1829）に差し出した出国願書の控えが残されている。（図7）

化政期にいたって北條家の医学は古医方派から次第に漢蘭折衷派への傾斜が認められる。

すでに佐渡奉行所詰格医師となっていた道益が、伊良子門に学んだ奉行所詰の医師本多勇斎筆写の「傷漢論釈義」を所蔵していることから、上洛修業の刺激を受けたであろうと推察される。

しかし、この頃の北條家が子弟を他国へ医学修業に出国させ、3か年も就学させることの出来る強固な経済的基礎を確立していたことも見過してはならぬことであろう。

6代玄通の筆写医書から、天保5年（1834）11月には水戸藩奥医師勝浦道益の塾中で修業中であり、「上池秘録」奥付けに「天保五年十一月

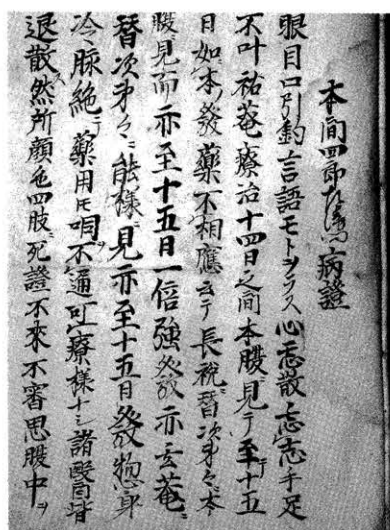


図5 地役人本間四郎左衛門病歴書

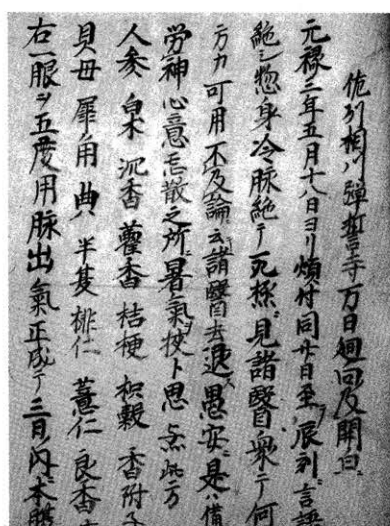


図6 相川弾誓寺万日病歴書

八日写之 水戸奥医師勝浦道益中ニ而玄通写之」とあることから、その医学の系譜は漢方を脱却することができていなかったことを知ることができる。

7代三省（通称道益 1845～1884）もその筆写医書「産科秘術秘録」の裏書きからみると、文久3年（1863）春にいたっても漢蘭折衷派の医学修業を行っていたことがわかる。

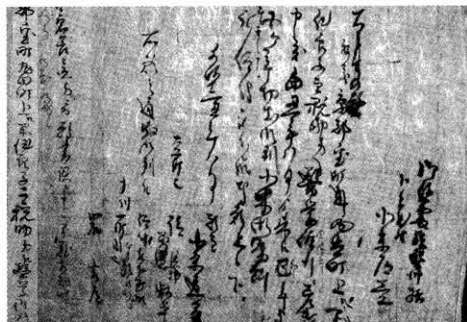


図7 北條道益医学修業出国願書控

しかし、その所蔵医書の中に「和蘭内景医範提綱」（宇田

川榛斎、文化2年刊）があるように、新しい西洋医学に対する関心が無かったわけではないが、累代の漢方医家としての重みが、その殻を破るには厚すぎたのであろうか。

明治以後も漢方医家として従来の開業権は一応維持できたものの、明治17年3月6日北條三省（7代道益）で北條家の医家としての系譜は一応中絶する。

李朱後世派から古医方派、ついで漢蘭折衷派と、その時代なりの医学界の変化に適応はしてきたのであるが、急激な西洋医学の受容をみずに終わった地方医家の典型的な一例をその医学の系譜にみるができる。

## IV 北條家の医学・医療関係資料

初代北條道益以来、累代の医師たちによって継承されてきた医学書をはじめ医療関係用具についての調査結果は次のごとくである。

### 1. 医学書

北條家が医家として独立する時代を傍証するに足る初代北條道益の筆写本および裏書きのある刊本が残されており、李朱後世派から古医方派、ついで漢蘭折衷派へと移行してゆく様をその所蔵本から知ることができる。



蔵書目録とその内容は資料⑨ (1) ~ (96) としてまとめたが、刊本のうち刊期の明らかなものは39種で、最も古い寛永3年(1626)版の「南北経験医方大成論」(京都宗文版)(図8)、から嘉永3年(1850)版の「温疫論」までがみられた。

版本で刊期が明記されてないものは13種あり、全刊本数は52種248巻であった。

筆写本は44種53巻が残されており、筆写年代は明暦元年(1655)から文久3年(1863)におよんでいる。筆写本中国医学書は6種であった。

北條家に伝えられた全医学関係書籍は96種301巻である。このうち中国医学書はすべて和刻本で、20種である。

北條家所蔵本は、(1)医経 (2)経脈 (3)診法 (4)蔵象 (5)方論 (6)傷寒 (7)雑病 (8)婦人 (9)小兒 (10)創腫 (11)口齒 (12)方集 (13)本草の各分野のものがほぼ系統的に整っており、馬医書という獣医学関係のものもわずか1部ではあるが認められ、近世地方医家の多岐にわたる医療活動が推測できた。

17世紀から19世紀中期にいたる筆写医学関係書にみられたところをまとめてみると、次のごとくである。

- (1) 北條家独特の家伝処方記録はない。
- (2) 近世農民の診療記録、個人宛ての処方記録は認められない。
- (3) 外科的手術・産科的な処置に関する記録は認められない。

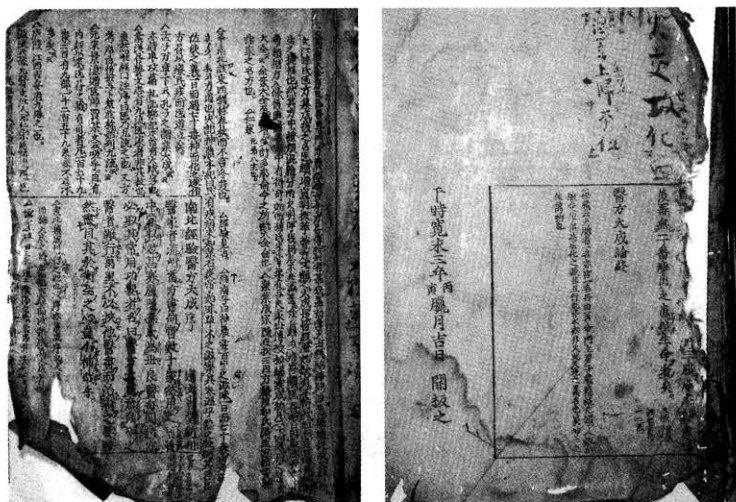


図8 「南北経験医方大成論」 寛永3年(1626)版

- (4) 北條家で門下生を持つという徒弟的な、あるいは系統的な医師教育を行った形跡はない。
- (5) 北條家出身医師による固有の医学的著述は認められなかった。
- (6) 筆写本の裏書きによって北條家の医師の医学修業の系統がわずかながら明らかになった。
- (7) 佐渡出身の医家の自筆の医学関係写本が、いかなる経路によって伝えられたかは明らかでないが、北條家に存在する。

川上文興（佐渡和泉村医師 1827～1875）が安政2年（1855）長崎で筆写した「本論字談」・「傷寒論記聞」、本多勇斎（勇節 相川町住、佐渡奉行所詰医師）の「傷寒論釈義」その他、吉田中務（伝不詳）筆の「生々乳焼製」・「雑方」、小野周庵（伝不詳）筆の小児天然痘関係の診断治療書「治痘用方」（天保4年5月記）などがみられる。

すでに述べたように、初代北條道益の受容した李朱後世派医学の和刻原典にはじまり、曲直瀬道三系の医書から古医方派、漢蘭折衷派の医学書へと、医学界の変化に順応しつつこれを受容してゆく北條家歴代の医師たちの医学修業の実態を、残された医学書によって証明することができる。経済的にもかなり裕福でなければ、地方医家として96種301巻の蔵書の累代集積はできなかったのではなかろうかと考えられる。これを支えた北條家の経済的实力を改めて見直す一つの側面資料として、医学史資料と同列に評価したい。

## 2. 古 眼 鏡

### (1) ケース（眼鏡入れ）について

同じ流人として同情をよせて治療した小倉大納言実起の死後、初代北條道益に贈られた眼鏡が所蔵されている。大納言藤原実起が愛用したと



図9 小倉大納言実起より初代北條道益に贈られた眼鏡とケース



図10 ケースの表とその内景

伝えられるものである。長楕円型の観音開き型の黒色皮革貼りの外装をされた扁平の眼鏡ケースに収められている。(図9・図10)

ケースの素地は木製であるが、外装の黒色の皮革には表・裏ともに圧痕充填法で描かれた唐草模様に類似した曲線模様がみられ、金箔が貼られている。

ケースの周辺は全周にわたって表・裏ともに渦巻模様に類似した装飾模様が圧痕充填法形式で描かれ、しかも一模様ずつ丁寧に金箔が貼り込められている。

この眼鏡ケースは長さ10cm、幅5cmであり、小判型の長楕円であるが、その外装に刻まれている装飾模様は近世の名僧沢庵禅師(1573~1645)遺愛の眼鏡ケース(東京品川・東海寺蔵)および近世の大儒伊藤仁斎(1627~1705)の眼鏡ケース(京都堀川・古義堂蔵)にその類似を求められる。

特に古義堂所蔵の伊藤仁斎遺愛の眼鏡ケースとその模様は酷似している。伊藤仁斎使用のケースは差込み式で腎臓型であるのに反し、北條家に伝来されているものは長楕円形で観音開き、錠掛け型という形式の差がみられるだけである。刻まれている模様だけをみると、同一製作者ではないかと疑われるほど酷似している。

## (2) 眼鏡レンズなどについて

眼鏡枠：もともと無かったものか、伝えられているうちに破損して失われたものなのか、存在しない。

レンズ：直径34mm、厚さ2mmの正円形の凸レンズ2枚からなる。レンズの材料は水晶製かガラス製かは、分析細片を採取することが出来ないののでいずれかを判別することは困難であった。

レンズのディオプトリー測定を県立ガンセンター新潟病院眼科においてニコン・レンズメーター(日本光学製)で行った結果、二つのレンズともに+3.25D(ディオプトリー)であり、正確に作製された老眼用凸レンズであった。

この程度のディオプトリーを有するレンズは、青年期1.2ないし1.5程度の大略正常視力を保持していた者が54歳ないし60歳の年齢にいたって使用する眼鏡用である。

小括：この眼鏡を小倉大納言実起が使用したことを直接証明する文書は北條家には伝えられていない。しかし後光明天皇の参議として仕える

小倉大納言実起（1621～1684）が政治事件に関係して佐渡へ流罪になったとはいうものの、本来の政治家ではなく、三条西大納言とともに儒学者として近習公家中では随一の学者で、経書に、また詩歌に親しむ一級の知識人であったこと、流罪になったのは天和元年（1681）10月23日で、歳すでに60歳であったこと、同種の老眼鏡を使用した伊藤仁斎（1627～1705）とはほぼ同時代に人文的活動を行った人物であり、仁斎使用の眼鏡ケースにも酷似した外装模様が存在すること、眼鏡レンズが+3.25 Dという56歳ないし60歳の初老者が使用したとみなして差支えないことなどから総合的に推測考案すると、60歳で流罪渡島してきた小倉大納言実起の遺物の眼鏡とみなして差支えないようである。

ただ眼鏡枠が存在しないので、支柱式天狗眼鏡であったものか、手持式阿蘭蛇眼鏡（無関節）あるいは手持式阿蘭蛇眼鏡（関節式）であったのかは不明である。

したがって眼鏡史資料としては、この眼鏡ケース（眼鏡入れ）とレンズは一応17世紀のものであると考えられるが、二つのレンズの正確な度数計測値からみると、レンズそのものは日本製である可能性が薄いようである。

17世紀の宮中で活躍していた第一級の文化人が、オランダ渡来の正確な度数のレンズを用いて作られた眼鏡を使用してもなんら不思議はないと考えられる。

北條家に伝えられた正確な経緯は明らかでないが、主治医もすでに老齢であったために贈与されたものであろうか。

本県における古い眼鏡資料として貴重なものである。

### 3. 医療関係用具

北條家歴代の医療活動に使用された医療関係器具としては、和秤・薬箱・薬研・薬匙・薬用百味簞笥・鍼・印籠・往診用駕籠などがある。保存状況は必ずしも良好ではないが、ほぼその時代なりの医療活動の一端をうかがい得るものが伝えられている。

#### (1) 和 秤

薬物の秤量に使用されたと推定される和製皿秤である。秤柄は失われているが、皿は真鍮製で直径7.9mmである。秤量錘は $13 \times 26 \times 13\text{mm}^3$ の真

鍮製で重量は50 g ある。

この鍾は26mmの稜面で2 mmの幅で角面を削り落としてあり、一面には江戸秤座の「守随」の2字が刻印されている。

また他の面には「御秤所守随正得」と刻印され、花押と、桐と思われる紋が刻まれている。

これらは長さ34.8cm、幅9.3～1.7cmからなる瓢箪形で、スライディング式木製秤ケースの中に収められている。

秤量鍾に刻まれている「守随正得」は、江戸秤座守随家第4代守随彦太郎正得（?～1691）で、元禄4年（1692）8月2日に死亡している。父の守随家3代守随彦右衛門正次は寛文10年（1670）4月25日佐渡国秤御改御用で佐渡出張中に病死し、鹿伏村の浄土宗光明寺（廃寺となり現在存在せず）に葬られている。

したがって守随正得の在職期間は寛文10年（1670）から元禄4年（1691）の22年間ということになり、この和製皿秤とその秤量鍾は17世紀末制作のものであることが判明した。



図11 和 秤

## (2) 薬箱と医療小道具

### ア 百味箱

木製、製作年代は不明。33×20×26cm<sup>3</sup>で、上部45、中部41、下部50の合計136の小引出しに136種の薬品が収められている。

薬品は和紙に包まれているが、ほとんど変質している。しかし墨書きの薬品名が読み取れるものがあるのでその概略を知ることができた。

薬品は、紅花・天門・山孟子・聚麦子・独苳・訶子・大丁字・山茱萸・石菖根・牛黒子・粳米・白豆・忍冬・竹筴・反鼻・草豆・石膏・烏頭・辰砂・当帰・川芎・大棗・甘草・生姜・桂枝・半夏などがある。

このなかでも辰砂が他の薬品に比して量的に多く伝えられていたが、梅毒治療に水銀系薬物としての辰砂が使用されていたことを推測させる。

#### イ 百味簞笥

木製、124×32×84cm<sup>3</sup>で杉材、88の小引出しがある。薬品分類収納用品。製作年代不明。(現在農業用種入れ)

#### ウ 薬箱 (薬籠)

木製、黒漆塗両掛型で2具の対となっており、往診用の薬籠である。各々5つの引出し箱があり、その中には保存状態はあまり良くないが往診用医療器具と薬品が収納されている。

#### (ア) 携帯用薬研・薬研棒

大・中・小のガラス製薬研と薬研棒で、そのカットの材質から輸入品であろうと推定される。

各薬研と薬研棒の大きさは表のごとくである。

薬研はいわゆる乳鉢型で、その製作年代の記録はないが、幕末から明治前期までの19世紀中頃のものと同推察される。

北條家7代三省(守信)の代に購入され、薬品混合調剤用に使用されたものである。

薬研の大小	薬 研		薬 研 棒		
	口 径	底 径	長 さ	尖端径	末端径
大	111 <sup>mm</sup>	56 <sup>mm</sup>	116 <sup>mm</sup>	27 <sup>mm</sup>	18 <sup>mm</sup>
中	85	43	102	20	13
小	73	36	102	23	18

#### (イ) 薬包紙おさえ真鍮棒

調剤された薬物を分包するさいに薬包紙を伸べ、固定するための185mm×4.5mm×4.5mmの真鍮の長角棒2本。

製作・購入年代は不明。

#### (ウ) 往診用薬入れ

径111mm、深さ31mmの蒔絵のある蓋付きの香合様の薬品入れである。携帯に便利な構造である。

その中には径約28mmの香合様の小薬品筒が梅花状に入れられ、その蓋部には篆書が記入されているが、薬品は収納されてはいなかった。蓋裏には牡丹の蒔絵がほどこされていた。

#### (エ) 医療用鍼 (針)

漢方医家の使用する銀鍼が包紙のままこの薬箱（薬籠）の小引出しに収納されていた。

この銀鍼は包紙の記載から、「京都三条通富小路西入南側、金銀御針所（本家根元）安永源兵衛」製のものである。（図12）

安永源兵衛は江戸期の各医学流派の、特に外科医療器具を製作していた外療道具師、鳳琉軒来安永のことである。

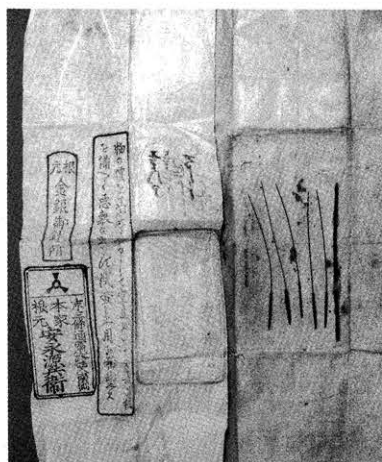


図12 江戸期医療用鍼（京都安永源兵衛製）

佐渡地方における医療器具、ことに漢方医によって慣用されていた鍼（針）が関西系のものであったことが証明できる。地方への鍼治療器具の伝播経路の一部が明らかになった。

#### （オ） 薬 匙

薬品調合の際に使用するものであり、銀製で、長さ183mm、横幅3mm、柄の厚さ2mm、匙部の径25mm、重さ20gの薬匙である。

製作年代は不明であるが、幕末から明治中期の19世紀中頃のものであろうと推定される。

#### （カ） 印 籠

五重の組み合わせ型、金蒔絵漆仕上げで、根附とともに優雅なもので、成分不明の薬品が少量収納されていた。北條家代々の医師の携帯したものであるが、製作者および製作年代は不明である。

### （3） 往診用駕籠

小倉大納言も使用したと伝えられるものと幕末の頃と思われるものの2つの駕籠がある。

後者は北條家5代道益こと道悦（通称道庵、嘉永元年〈1848〉11月29日没）が佐渡奉行所詰格医師となった頃に使用された往診用の駕籠と伝えられている。

### （4） 薬師如来像

初代北條道益はかつて真言宗の僧であり、還俗して医師となったが、

5代道悦が勧請したと推察される薬師像があり、信仰と医療併存の旧態の側面を推定できる。

薬師像は木彫りで、高さ12cmの坐像であり、厨子内に安置されている。

台座の裏に「京都智積院大仏師法橋福岡長慶作 文政元寅年十二月吉日」と銘がある。(図13)

真言宗智山派総本山智積院に所属する仏像彫刻師の作品であるが、手部が欠損している。

現在は北條家仏壇本尊として祀られている。



図13 薬師如来像

#### (5) 神農像

北條家の什物帳および北條本家礼法・年中行事記録によると、神農像(作者不明)の一軸があり、毎年正月に座敷床間の向かって左側に(中央は天照皇太神宮、右は弁才天)神農像を掛けることとなっている。

正月8日には特に神農氏を祀る漢方医家の行事が行われたが、現在神農像は箱のみ存在し、画幅は失われている。



## V ま と め

北條家の医学的文化資料についての調査結果を要約すると、次のようである。

(1) 17世紀末から19世紀半ばにかけて継承されてきた漢方医家の典型的な医学資料の蓄積がみられた。その資料の保存状況は大むね良好であるが、今後虫蝕防止その他の定期的処理が望まれる。

(2) 医療活動と医業の成果を土台として、知識人の流人が地域の有名な人となり、また資産の蓄積によって地主階級として成長し、累代の努力によって一般開業医から奉行所詰格医師という公的な地位を獲得してゆく一例を北條家に認めることができた。

(3) 北條家における医師の教育、独特の医学的著述の業績は認められなかった。また家伝の処方、固有の処剤製造の形成はない。採薬、薬園の開発についての史実は存在しなかった。

(4) 有名人（小倉大納言実起）の治療実績による名声が医家存続の支えとなった形跡がある。それに関連して、本県で最も古いと考えられる医師による3人の病歴書が北條家に在存することが明らかになった。

これは本県の医療病歴史上貴重な発見であった。

(5) 北條家の現存所蔵医学書は96種301巻であり、寛永3年（1626）から文久3年（1863）までの時代にわたる刊本および筆写本からなる。その大部分は漢方系であり、秩序だった蒐集が行われていた。

(6) 北條家は地域の富裕階層として文化人的活動への指向がみられるが、近代にいたるまでは極めて控え目であり、医業を廃しても、その富裕さの故に医学書・医療関係資料の保存が行われてきた。李朱医方派（後世派）から古医方派、漢蘭折衷派へと推移してゆく地方医家の実態をその蓄積された医学・医療関係資料から知ることができた。

(7) 医療器具にも医学書と同様に保存されて然るべきものが残されていた。

(8) 一般農民の疾病、地域衛生医事に関する北條家の寄与を証明する具体的な資料は認めることができなかった。

(9) 北條家の医学的系譜についての研究は今後にまたねばならない。（本調査に御協力をいただいた北條家の方々に心から御礼申し上げます。）

## VI 調査資料集

### 資料① 北條家文書 (1)

謹奉ト筮延宝七年(1679)於立春佐渡国吉凶占之



雷水解之卦 筮無変多吉卦也

解ハ西南ニ利アリ、往ク所无キモノハ其レ来リ復ッテ吉ナリ。往ク攸有ルモノハ夙クシテ吉

解ト云ハ緩ナリ、物事ノフサガリタルヲヒラキムスモンタルヲノトキ寛祐ナルヲ云ナリ

西南ニ利アリト云ハ広大平易ニシテ国之難ノハレ、煩ヲ除キ安浄ナルヲ云ナリ、无所往ト云ハ先ノ仕置不道ニシテ国治ラズ依是人他国ヘ散リ去ル、亦国豊ナルニヨッテ人皆戻ル、是ヲ其来リ復テ吉ナリト云

有攸往ト云ハ若人物事之不至不待散去ハ早ク心ヲ付テ物事ヲ緩スルヲ夙吉ナリト云也

象曰解險ニシテ以テ動ク動テ而シテ乎險ニ免ニ乎險解

解ハ西南ニ利アリ往テ衆得ルソ也、其レ来リ復テ吉乃中ヲ得ルソ也  
有攸往、夙吉ナリ往テ功有也

天地解テ而雷雨作雷雨作シテ而百果草木皆甲析解之時大矣哉

象曰雷雨作ルハ解ナリ君子以過ヲ赦宥罪

十二月ニハ祝有、六月ニ国ノ災險除、八月ニ吉事有、十月ニ至吉シ

延宝七年立春

愚安 道益占之

[北條家藏]

### 資料② 北條家文書 (2)

#### 一、小倉大納言御病證之様体

天和元辛酉年十月廿三日、佐州江左遷、同天和三年四月上旬ニ御煩付之様体、惣身浮腫、両足ニ瘡湿出、陰囊腫痛甚シキ、玄意、長説(節)替々之療治終、藥不相応而次第々ニ重リ五月中旬ニ御基所見立事三度、然所奉行所ヨリ五月十二日国中之医者ニ観音寺江会合而以配剂御藥可上由御意ニヨリ則任御意致相談、藥方ヲ書付掛御目申所可然様思召御用被成度旨被仰候ニ付調査仕指上申

所、玄意邪意謀ヲ申ニ付其藥者無用御煩次第々成重、同五月廿六日某ヲ被召是非ニ藥御望被遊候ニ付、然者五藏（臟）之通用ヲ一々尋申處五藏（臟）ニ一ツモ不足ナシ、御痛之甚シキハ瘀血之ナス處、大小便之不通疝氣ナス所、此兩証ヲ治者早速御平癒可有ト申上ケ、同五月廿八日巳ノ刻ニ御藥、未ノ刻マテニ兩度被召上、小便思召尽通被召上候所、惣身之御痛スキト去テ成程御心地能、藥之様子アマリ不審ニ思召様子御尋被成候ニ付、是ハ水戸清庵一味配剤ノ伝ニ而医書之諸方ニハ無之藥十一味ニテ惣身之御痛ニ便之不通所之致通用藥方御前ニテ調合可仕ト申候エハ御満足被遊、御兄弟様并宗伯、玄立、有正見而則此方

人參 白朮 沢瀉 沉香 茯苓 枳核 練子 桃仁 延胡索 木通 荊芥 甘 如此也。

右同銘五服目 六月朔日 七十二日目ニ御食サカツキニ一ツ御味噌汁御用成程心能、同二日ヨリ次第々々ニ御食進ミ、然所ニ同三日ヨリ瘀血下ル事同七日マテニ大分ニ下リ、同八日ニ大便通次第々々ニ御食進ミ、七月下旬ニスakit御本腹則至為御祝儀奉書御樽、肴、金子千疋拝領仕、則御樽、肴者到（致）頂載（戴）、金子之儀御遍（返）進申上候、畢

（加筆）

右之金子返進被申候意ハ、貴賤ハ各別たりといへとも流罪之儀ハ同前之事ニ候、我等手前不自由ニも候はば、成程奉請可申請候得とも、左様ニも無之候、定而島之御暮し御内所も御不自由ニ被成御座候はん物ニ候へハ、如何ニ奉存候と岩佐嘉右衛門ヲ以乍無礼御返進申上候由、常々咄被申上候

〔北條家藏〕

### 資料③ 北條家文書 (3)

本間四郎左衛門病證

眼目口引釣言語モトララス、心忘散忘志手足不叶、祐庵療治十四日之間本腹ニ見テ至テ十五日如ニ本ノ發藥不相応云テ長悦ニ替、次第々々ニ本腹ニ見而亦至十五日一倍強發亦玄庵ニ替、次第々々ニ能様ニ見亦至十五日發惣身冷脈絶テ藥用トモ咽ヲ不通可療様ナシ、諸医皆退散ス、然所顔色四肢ニ死証不來、不審思腹中ヲ摩、將ニ鳩尾ニ積聚如石之有

塊此証アリ、病名ニ口伝秘テ不書

神明調心湯

石菖蒲 人參 白朮 茯神 遠志 酸棗仁 當歸 南星 全蝎 天麻  
鬱金 虎皮 生地黃 甘

右煎用至三度鳩尾ノ塊動テ退ク、脈出テ氣正成テ言語モ叶次第二日経  
テ本腹ス

〔北條家藏〕

資料④ 北條家文書 (4)

佐州相川彈誓寺万日廻向ノ及開白

元禄三年五月十八日ヨリ煩付、同廿日辰ノ刻ニ至テ言語絶シ、惣身冷  
脈絶テ死極ニ見、諸医衆テ何藥方カ可用不及論云テ、諸医去退ス、愚安  
(案)ニ是ハ備心<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>勞神<sup>レ</sup>心意忘散之所ニ暑氣ヲ挾ト思与此方

人參 白朮 沉香 藿香 桔梗 枳殼 香附子 貝母 犀角 典 半  
夏 桃仁 薏仁 良香 甘

右一服ヲ五度用、脈出、氣正成テ三日ノ内ニ本腹ス

〔北條家藏〕

資料⑤ 北條家文書 (5)

小倉大納言実起卿

御家来 辻 喜内

中安吉左衛門

始ハ羽田町市郎(兵)衛宅ニ御止宿、又天和二(年)四月ヨリ九月迄  
同町常德寺ニ御止宿、又同年十月ヨリ貞享元(年)三月迄又岩佐嘉右衛  
門宅ニ御止宿、同年四月ヨリ浜町ト云所へ私新宅請仕上ケ奉リ、朝暮御  
不自由無之用ニ仕候所、終ニ御両所御逝去遊ハサレシ事残念可申上様候、  
然ルニ其節齋様御枕元ニ私ト居並実起卿様御口上御下ケ候ハ、若シ齋勅  
免モ有之候ハ、私ノ厚情江戸表へ御申立厚思ヲ報ジ候様同年二月十六日  
御遺訓有之事卿忘却スヘカラズ

〔北條家藏〕

資料⑥ 北條家文書 (6)

猶々京都相当御用之儀可被仰付候、以上、未得貴意候得共、一書令啓

上候、時分柄暑気甚敷候、弥御勇健に御勤候哉承度存候、然は小倉大納言去年当年兩度之大病之内、去年は御影に而快氣大慶至極に奉存候、当春も色々被尽御心被下候由兼て両子な被申越候而承申候、此度休三喜内罷登具ニ承、扱々御懇情之段ニ忝仕合御礼難尽短筆候、弥以此上一舟、齊兩人へ御懇意に被成被遣可被下候、偏以頼入奉存候、御厚情之段一生忘脚仕間敷候、且又小山四郎右衛門殿御念比之由承、是又大慶至極存候、

御序ニ可然御心得被成御礼被治入可被下候、兩人之儀も弥々御頼被成可被下候、先為御礼罷、札如此御座候、恐惶謹言

林鐘十二日

法眼 祐玄（花押）

北條道益様へ下

〔北條家藏〕

資料⑦ 北條家文書 (7)

尚々此六歌仙一舟道具之内ニ有之候間進上申候由、正孝院にも当地相立之御用可被仰付等之已来は以愚札不可被仰付候下申入疎遠之至存候、弥御堅固御座候由、今度高橋氏御上京ニ而令承知珍重存候、当所無異議、罷存候、然は一舟永々病中色々御懇情之由、死去の後迄万事御取持被成被下候由、御懇志之段千万忝存御候

為御礼如斯之齊壺人ニ而□□無力可被存と笑止ニ存候、然とも各御懇意之由大慶令安堵候

尚以諸事被添芳心可被下候、心外期後音之時候、恐惶謹言

卯月十一日

法眼 祐玄（花押）

北條同益様人々御中

〔北條家藏〕

資料⑧ 北條文書 (8)

尚々珍物色々被掛御意、正孝院ニも令披露候、拙者方な能々相互得可申入旨之当地先頃之為御報五日十五日相応之御用等は御状慥ニ相届き令悦披候、可被仰付之候、弥以御無事の由珍重存候、当夏は爰元暑氣別て甚敷、諸人難儀仕申も候、拙者家内無異議罷存候

一、石腸 壺包 石鐘乳 壺包

一、鰯 壺折

一、雪海苔 壺袋

右之通被御意過分至存候、石腸、石鐘乳、此度初而致一覽候、石腸之能迄具に被遊聞大變に存重宝候、御礼筆紙に難申謝候、且又斎方の義不相替御懇意の段、委細令承知満悦此事二候、浜町ニ新宅致造作居住之由、各御取持放、普請等丁寧に出来申候由、御取持故と御厚情不残存候、常々も仮初の風気にも御薬御心易申請候斗ニ肝煎御世話罷成候段、斎方な申候上に堀崇伯物語ニ而承達、彼是忝仕合存候、弥御念頃ニ被仰通可被下候

一偏々々頼み存候、尚期後音候時々、恐惶謹言

七月十日

法眼 祐玄（花押）

北條道益様

〔北條家蔵〕

資料⑨ 北條家所蔵医書目録

〔I〕（刊本）

- |                                    |                    |        |        |
|------------------------------------|--------------------|--------|--------|
| (1) 南北経験医方大成                       | (元) 孫允賢            | 寛永3年刊  | 1巻(和)  |
| (2) 名方證類医書大全<br>(内題医学源流)           | (明) 熊宗立            | 寛永9年刊  | 1巻(和)  |
| (3) 寿世保元                           | (明) 龔延賢(雲林)        | 正保2年刊  | 10巻(和) |
| (4) 明医雜著                           | (明) 王綸             | 正保2年刊  | 1巻(和)  |
| (5) 補註原病式<br>(重校補註素問玄機原病式 東庵饗庭立伯刊) | (金) 劉完素            | 慶安4年刊  | 1巻(和)  |
| (6) 南北経験医方大成                       | (元) 孫允賢            | 明暦4年刊  | 1巻(和)  |
| (7) 医学正伝                           | (明) 余応奎編(博天民)      | 万治2年刊  | 8巻(和)  |
| (8) 玄治方口解                          | 岡本玄治               | 寛文4年刊  | 1巻(和)  |
| (9) 新刊十四経経絡發揮                      | (元) 滑寿仁            | 寛文5年刊  | 2巻(和)  |
| (10) 師語録(下巻)                       | 曲直瀬道三              | 寛文10年刊 | 1巻(和)  |
| (11) 新編食物備考大成                      | (編著者名ナシ)           | 延宝2年刊  | 3巻(和)  |
| (12) 医教正意                          | 草刈三越(羽州山形)         | 延宝7年刊  | 4巻(和)  |
| (13) 脈譯簡略                          | 曲直瀬道三(正慶・初代道三) 宗源版 | 延宝8年刊  | 1巻(和)  |
| (14) 合類方書摘要                        | 小川宗本(常陽)           | 天和2年刊  | 5巻(和)  |
| (15) 新鐫増補脈論口訣                      | (編著者名ナシ)(首巻欠)      | 天保3年刊  | 4巻(和)  |
| (16) 難経本義                          | (元) 滑伯仁            | 元禄4年刊  | 2巻(和)  |
| (17) 改正婦人良方                        | (明) 陣自明(薛立齋校)      | 元禄6年刊  | 4巻(和)  |
| (18) 本草摘要                          | (編著者名ナシ)           | 元禄10年刊 | 1巻(和)  |
| (19) 食物和解大成                        | 馬場幽閑               | 元禄11年刊 | 1巻(和)  |
| (20) 医学至要秘抄                        | (編著者名ナシ)           | 元禄12年刊 | 2巻(和)  |
| (21) 小兒活法                          | 松下元真(讃陽高松)         | 正徳3年刊  | 1巻(和)  |
| (22) 重修金匱要略                        | (漢) 張仲景・林億校        | 寛保2年刊  | 2巻(和)  |
| (23) 増補師語録                         | 曲直瀬道三              | 貞享1年刊  | 6巻(和)  |

(24)	類聚方	吉益為則 (芸陽)	明和1年刊	1卷 (和)
(25)	藥微	吉益為則	明和8年刊	1卷 (和)
(26)	産論	賀川玄悦	明和2年刊	1卷 (和)
(27)	産論翼	賀川玄迪	安永4年刊	1卷 (和)
(28)	医療手引草	鳥巢勝兼斎	安永5年刊	2卷 (和)
(29)	重訂古今方彙	望月三英・甲賀通元	安永9年刊	1卷 (和)
(30)	名家方選	山田玄倫	天明1年刊	1卷 (和)
(31)	古方便覧	吉益東洞	天明2年刊	1卷 (和)
(32)	解体瑣言	柚木太淳 (平安)	寛政11年刊	1卷 (和)
(33)	瘍医大全	(清) 顧静斎	寛政12年刊	1卷 (和)
(34)	微瘡約言	和気惟享	享和2年刊	2卷 (和)
(35)	和蘭内景医範提綱	宇田川榛斎	文化2年刊	3卷 (和)
(36)	金匱要略方論	(漢) 張仲景	文化2年刊	1卷 (和)
(37)	名家方選	平井庸信撰 浅井良校編	文化4年刊	1卷 (和)
(38)	方苑	平岡水走	文化8年刊	1卷 (和)
(39)	温疫論	(明) 呉有性 (荻野台州刊)	嘉永3年刊	2卷 (和)
(刊年記不明本)				
(40)	薬性能毒目録	曲直瀬玄朔 (正紹)		1卷 (和)
(41)	黄帝内経靈枢	繡谷 書林 周日校重刊		24卷 (和)
(42)	重広補註黄帝内経素問	{ (唐) 啓玄子王 水次注 (明) 熊宗立		22卷 (和)
(43)	古今医統	(明) 徐春甫		100卷 (和)
(44)	瘡洞集	(元) 魏博王		1卷 (和)
(45)	局方發揮	(元) 朱丹溪		1卷 (和)
(46)	新版全九集	(明) 僧月湖 (7巻欠)		6巻 (和)
(内題 類證辨異全九集)				
(47)	仲景全書	(漢) 張仲景		1巻 (和)
(48)	重刊證類本草叙	(唐) 慎微		1巻 (和)
(49)	聖功方 (内題 授蒙聖功方)	曲直瀬道三(上巻のみ、下巻欠)		1巻 (和)
(50)	日用功方 (増補燈下集)	曲直瀬(啓迪院)道三		4巻 (和)
(51)	切紙約言 (内題 切紙)	曲直瀬道三		1巻 (和)
(52)	切紙	曲直瀬道三		1巻 (和)

## [II] (筆写本)

		丁数	筆写人名	筆写年代	巻数
(53)	原機啓微集 同附録	(明) 薛己 90	ナシ	ナシ	1
(54)	名方類証医書大会	(明) 熊宗立 23	ナシ	ナシ	1
(55)	医宗必讀 (脈訣)	(明) 李中梓 28	ナシ	ナシ	1
(56)	證治準繩 (第7冊のみ)	(明) 王肯堂 15	ナシ	ナシ	1
(57)	傷寒論記聞	中西君友 55	川上文興	ナシ	2
(58)	傷寒論釈義	50			
		稲葉通達 51	本多勇節	ナシ	6
		40			
		41			
		51			
		45			
		35			
		99	北條玄通?	ナシ	1
(59)	病困考				
(60)	道三秘集	曲直瀬道三 111	初代北條道益?	ナシ	1
(61)	十薬神書	21	ナシ	ナシ	1

(内題 治勞證十藥神書引、附王堂宗旨治伝屍勞虫法)						
(62)	三河国徳本翁十九方	稲葉文礼 和久田叔虎 校	19	ナシ	ナシ	1
(63)	薬方選		40	ナシ	ナシ	1
(64)	道三薬方		70	ナシ	ナシ	1
(65)	方極 (内題 黙容齋方函)	高島敬義	55	ナシ	ナシ	1
(66)	秘録 (内題 薬方秘録)		21	ナシ	ナシ	1
(67)	医書	半井卜養軒	63	初代北條道益?	ナシ	1
(68)	治痘用方 (戴曼公治痘用方) 附 痘疹必用	池田正直 吉村遍著	29 8	小野周庵	天保4年5月	合 1
(69)	唇舌経験口訣 (内題 口中経験良方並取針法又口中経験方)		28	ナシ	ナシ	1
(70)	扁鵲流秘伝茂之書		31	ナシ	ナシ	1
(71)	古医方 (梅毒輕粉療法)		5	ナシ	ナシ	1
(72)	毒瘡大全		23	ナシ	ナシ	1
(73)	人体害虫図		5	ナシ	ナシ	1
(74)	外科秘術		4	ナシ	ナシ	1
(75)	上池秘録	西川元章	59	北條玄通	天保5年11月	1
(76)	産科秘術秘録	奥劣斎	31	北條守信 (三省?)	文久3年春	1
(77)	産科秘要		33	ナシ	ナシ	1
(78)	産書		29	初代北條道益?	ナシ	1
(79)	眼科全書	(明) 袁学淵范斬王	79	ナシ	ナシ	3
			58			
			73			
(80)	兼康先生口中療治秘書 (内題 兼康家伝秘方口中針)		19	北條玄通	天保14年3月	1
(81)	文倬医書		48	2代道倬?	ナシ	1
(82)	聞集記		79	北條道益	文政13年冬	1
(83)	本論字談		100	川上文興	安政2年	1
(84)	仰人尺寸		15	北條玄通	天保12年	1
(85)	秘伝書		11	ナシ	ナシ	1
(86)	雜記		6	ナシ	ナシ	1
(87)	生々乳焼製 (ソッピル製法)		10	吉田中齋	ナシ	1
(88)	二十四方秘伝		7	〃	ナシ	1
(89)	雜方		8	〃	ナシ	1
(90)	雜方		7	〃	ナシ	1
(91)	雜方		5	〃	ナシ	1
(92)	雜方		22	〃	ナシ	1
(93)	雜方		14	〃	ナシ	1
(94)	雜方		28	〃	ナシ	1
(95)	北條本家礼法口碑集録		10	ナシ	ナシ	1
(96)	馬医聞書 (内題 安駟活土集卷第三上)		9	ナシ	明暦元年	2
			30			

[北條家蔵]



資料⑩ 北條家文書 (9)

京都室町丸田町上ル所 伊良子主税助方江医学修行五ヶ年季 (御判願控)

御役所表詰医師格

下矢馳村

北條道益

私義京都室町通り丸太町上ル所伊良子主税助方へ医学修業江差遣申候儀、当丑年八月な来ル巳 (卯) 年迄五ヶ年 (三年ニ直申候) 切出御判小木御番所江被仰付被下候様奉願上候、以上

文政十二丑年八月

願主 北條道益

大工町也 請 美濃部叔草

右願之通出御判被仰付被下置候奉願候、以上

相川一町目也 岩 玄道

郷宿善之丞方ニ而願書認メ申候間難相知時ハ同人方へ御出被成候

[北條家蔵]

資料⑪ 北條家文書 (10)

小倉大納言実起 後ニ称ス雪舟ト

御家来

辻 喜内

中安吉左衛門

後ニ法赫シテ休三ト云

貞享元甲子三月十八日

御逝去 春秋五十大安寺ニテ

奉葬送高安寺三世梅庵和尚

導師 尊骸ハ鹿伏観音寺納

法名 義孝院殿花応雪舟大居士

実起卿長男

小倉宰相公連 後ニ称ス一舟ト

貞享元甲子九月廿二日御逝去

春秋二十八導師梅庵和尚鹿伏村観音寺ニ葬ル

法名 堅良院殿鉄山一舟大居士

実起卿御次男

竹<sup>ツ</sup>渕<sup>ツ</sup>形部太夫季伴 後ニ斎ト号ス

竹渕家江養子、実父ノ縁座ニ依テ同左遷ト云

当今ノ一宮御事外祖父小倉大納言方ニ御座（オハシマシ）ケル所御養育ノ仕形不宜御養生ノタメ叡慮ヲモ伺ズシテ御灸治ヲナシ、此宮女御ノ御腹ニモナク剩蝕降誕旁以テ御継体遊バシ難ク、大覚寺御門跡御弟子タルベキ哉ト、当今両伝奏花山院大納言、千種前大納言、所司代戸田越前守参府ノ時東都江被仰遣故、叡慮ニ任セラルベキ旨御返答アリシヨ

然ルニ小倉大納言勅命ヲ背キ一宮参内無之様ニシナシ其身モ所勞ノ由ニテ、朝参ヲモナサズ、此段甚以逆鱗ノ旨越前守ヨリ江戸表江言上セシニヨリ父子三人当国へ左遷被仰付

天和元酉十年廿八日越前守宅ニヲイテ申渡シ雜式小河長右衛門、岡又兵衛并同心十五人相添十一月晦日越後出雲崎ヨリ出船当国小木湊へ着岸、十二月三日相川御役所御広間江被罷出父子三人共引渡シ畢

始ハ当国相川羽田町四郎兵衛宅ニ御止宿、天和二年四月ヨリ九月迄同町常德寺ニ御止宿、同年十月ヨリ貞享元三月迄岩佐嘉右衛門方ニ御止宿

同年四月ヨリ相川浜町ト云所へ私諸事物入新宅御普請奉仕上ケ、朝夕ノ御不自由無之様ニ仕候所、終ニ大納言様三月御逝去遊バシ、其節御病床ニテ私ト宰相様、斎様江御遣訓ニハ不思議ノ縁ニテ道益厚情ニ預リ候故、京都ヨリ御勅免モアリシカバ道益事江戸御老中へ申立、子孫相続繁栄ノ御手当被下置候様可申達由堅ク申聞候間、子孫ニ至ル共可申伝時節ヲ見合セ小倉家へ可願出事

元禄二己巳二月

北條道益自筆

〔北條家藏〕

資料⑫ 北條家文書 (11)

覚

一、 御真筆

横物 壱幅

一、 御目加祢

壱ツ

一、 御乗おろし御乗物

壱棹

右之通拙者ハ四代以前之先祖拝領仕候故、家之重宝ニ相持伝居申候、御真筆者則写指上申候、以上

辰

佐渡国雑太郡下矢馳村

北條道庵

[北條家蔵]

資料⑬ 北條家文書 (12)

乍恐書付を以奉願上候

下矢馳村役目之者共奉申上候、私共村方北條道庵倅玄通ト申候者、生レ付柔和ニ而幼少な人と口論をも不仕身持宜敷医業出精仕、元々酒を好候得共去ル御儉約触以来朝六ツ時迄暮六ツ時迄禁酒仕、其上継母へ至テ孝行ニ仕、二十七八ヶ年之間母へ一言之口答へをも不仕、如何ニも家内収り方穩便ニ御座候趣、右有体奉申上候、以上

弘化三年五月

下矢馳村

組頭 季十郎

名主 藤兵衛

[北條家蔵]

資料⑭ 北條家文書 (13)

以書付奉願上候

一、佐州下矢馳村北條道益奉申上候

萬治年間之頃三日市太夫治郎様当国江始メテ御渡海被成候由、其節越後国寺泊り迄中興村与十郎と申者と私先祖道益同道ニ而御迎□□り御同船仕候訳を以テ年ニ二千度之御箱并中建之曆頂戴仕候、当代ニ一万度之御箱相受ケ罷在候

此度ハ右等之訳を以テ大建之曆壺枚永代頂戴仕度相叶被下候ト冥加金ニ金壺兩御米差上度候、此段奉願上候、以上

嘉永元年申十一月

佐州役所詰格

北條道益

同苗玄通

三日市太夫治郎様

御名代様

[北條家蔵]

## 参 考 文 献

- 1) 林英夫・浅見恵『守随家秤座文書』 新生社 昭和42年
- 2) 岩木 抃『相川町誌』 相川町役場 昭和 2 年
- 3) 磯部欣三・田中圭一『佐渡流人史』 雄山閣 昭和50年
- 4) 磯部欣三（本間寅雄）『近世佐渡の流人』 文芸懇話会 昭和44年
- 5) 金沢村教育会編『金沢村誌稿本』 第11篇 伝記 昭和 9 年
- 6) 永井次芳『佐渡風土記』 佐渡郡教育会 昭和16年
- 7) 萩野由之『佐渡人物志』 佐渡郡教育会 昭和 2 年
- 8) 長岡博男『日本の眼鏡』 東方書房 昭和42年
- 9) 宗田一『目で見る医療器械のあゆみ』 M. A. C Medical  
Apparatus Culture Vol.1~Vol.4 No.10 医事日報社 昭和35~38年
- 10) 藪内清・宗田一『江戸時代の科学器械』 恒星社 昭和39年
- 11) 佐渡郡教育会編『佐渡年代記』 佐渡郡教育会 昭和10年